

The Fixer における個と集団

著者	井崎 浩
雑誌名	宮崎大学教育文化学部紀要 創立130周年記念特別号
ページ	71-78
発行年	2015-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10458/5449

*The Fixer*における個と集団

井崎 浩

Individuals and the Collective in *The Fixer*

Hiroshi IZAKI

I.

バーナード・マラマッド (Bernard Malamud, 1914–86) の長編第4作目にあたる『フィクサー』(*The Fixer*, 1966) において主たるモチーフとして扱われている虐殺はポグロムと呼ばれ、一般にユダヤ人に対する集団暴力事件を指す。主にロシアや東ヨーロッパで頻発したものだが、西ヨーロッパ諸国でもしばしば発生していた。その死者数は推計の域を出ないが、大規模なものではロシア革命後にウクライナで起こったポグロムでは 10 万人を越す犠牲者を出したと言われており、数百年にわたって断続的に発生してきたポグロムによる犠牲者の総数は数十万人にのぼると見てよいだろう。

ポグロムは中世以来の宗教的偏見を土台とし、激化する階級対立の中でユダヤ人が政治的にスケープゴートとされてきた悲劇なのだが、『フィクサー』の背景となるのは、革命を目前に控えた帝政末期のロシアであり、不穏な政情をバックにまさにポグロムが頻発していた時代となっている。直接的には、1911 年に起きたペリス事件¹という冤罪事件をもとにしていて、基本的にはこの事件の概略をそのまま用いている。そういう意味では、一種の歴史小説の形態をとっているとも言える。内容としては、主人公 Yakov Bok がユダヤ人であるがゆえに、儀式に使う目的でキリスト教徒の少年を殺したとの嫌疑²を受け、無実の罪で投獄され、実に非人間的な虐待を二年以上にわたって被ることになるといったものだ。ヤーコフは民衆の経済的・政治的な不満を反ユダヤ主義を利用して封じ込めようとしていた当時のロシアの国家権力によって格好のスケープゴートとされてしまったのだが、もし迫害に負けて自分の罪を認めてしまえば、間違いなく大規模なポグロムが発生するであろうという、非常に緊張したシチュエーションにヤーコフはおかれているわけだ。

II.

最初の段階で、ヤーコフはただ自分だけの《自由》に関心を寄せるのみであって、周囲の他者や世界の問題を完全に無視してしまうという、徹底して利己主義的な自己の世界に閉じこもった状態にある人間として描かれるのだが、実際、妻や、義理の父親への酷とも言える言動やユダヤ人同胞に対する見解には、自分の非を一切認めず、一方的に他者を切り捨てていこうとするヤーコフの姿勢がはっきり現れている。

こうした人間関係に加えて、ヤーコフの政治や歴史に対する考え方も、一切の関わりを避けようとする、言わば、傍観者のそれだ。ヤーコフのこのような見解は、他者との関係を無視したところで、社会とは隔絶した単なる個人としての《自由》のみを追い求めるという彼の姿勢から生まれている。そのことは、スピノザの《自由》概念についてヤーコフが語る言葉によく現れている。ヤーコフが牢獄でさまざまなことを考え、整理するうえで

スピノザの哲学は思考のフレームワークとして重要な意味を持っているのだが、ヤーコフはスピノザの言葉を引きながら、世界とは全く無関係に、ただ「思考」の中だけで、現世の「悩み」を超越し、「理性」の「宇宙」へと参入出来るような、抽象的で理性的な《自由》を獲得出来るのだと考えている (77)。

しかし、ヤーコフの《自由》観は個人の《自由》に限られたものでしかなく、スピノザの見解のもう一つの側面を全く無視したものとなっている。確かに、スピノザが抽象的で理性的な《自由》観を抱いていたことは事実だが、しかし、スピノザはまた一方では、「社会における《自由》な人間とは、自分の隣人たちの幸福や知的な面での自由といった事柄に積極的な関心を持つものである」 (78) とも考えていた。実際、スピノザは政治にかかわる書物をも書いていたのであり、社会的な問題に対しても積極的にかかわっていきこうとしていたのだ。

スピノザとは全く対照的なヤーコフだが、しかし、個人としての《自由》を得ようとして、どんなに他者とのつながりを廃し、世界との関わりを拒絶したところで、いったん歴史や政治の網の目の中に搦め捕られてしまえば、個人の抽象的な《自由》など脆くも潰え去ってしまうものにすぎないのだ。個人の自由のみにこだわっている彼は、その結果、自分の置かれている立場についての広い視野を持つことができず、彼を拘束し、非人間的な苦痛を与えつづける外的な脅威に対して、ただひたすら無力なままでのままだ。ほかにない。

ヤーコフの陥っているこのような考え方は、他者と結び付くことのない個 (人) として、他者や世界に対する《責任》から逃れるために、自己の内に閉じこもることを理想とする生き方を徹底したかたちで象徴するものであると言える。

このような考え方に留どまる限り、ヤーコフは社会の齎す脅威になら積極的な態度を取ることが出来ず、彼自身の精神も《自由》とは掛け離れた状態に陥らざるをえない。結局、ヤーコフは理想としていた、個としての抽象的な《自由》など自分には持てはしないのだと思い知ることになる。

III.

ヤーコフや、ユダヤ人たちの状況に比べ、一般のロシア人は遙かに《自由》なわけだが、ひとたび歴史的、社会的な視点から眺めるならば、別の問題が浮かび上がってくる。投獄される前すでに、ヤーコフはロシアの歴史についての書物を読み、ロシアの歴史を通じて繰り返されてきた、支配者による民衆への、まるでユダヤ人へのそれとかわらぬような虐殺の悲惨さに驚愕を覚えている。その後、長い獄中生活の中で苛酷な扱いを受けた後、ロシアの国家が基本的な正義を欠いており、人間性というものを侮蔑する非人間的な国家であることに気付いている。また、ヤーコフの弁護士は、より広い社会的な視野に立って、ヤーコフの事件を日露戦争以来のロシアの歴史の状況とはっきり結び付いたものと説明している。つまり、大衆の不满をヤーコフを利用してユダヤ人の虐殺に向けようとするロシア政府によって、多くのロシア人達が操られていたのだということを、ヤーコフはついに認識することになる。だからこそ、ヤーコフは、「ロシアには単なる反ユダヤ主義以上の、もっとずっと恐ろしい国家による悪」 (315)、Mark Ratner という批評家も言っているように、彼は「ロシアの国民を縛り付けている盲目的な無知という悪」 (82) を典型的に表すものが存在していると考えられることになるのだ。最後にヤーコフは以上のような事柄の総合として、「このロシアという国家に住む我々、ユダヤ人だけでなく非ユダヤ人のロシア国民も、みな、なんと抑圧され、無知で、惨めなことだろう」 (333) と結論を下す。その意味では、ヤーコフが幻覚の中で「ロシアは囚人の国だ」 (317) と断言するのも頷けるところだろう³。

しかし、ロシア人達の真の悲劇は、彼らが、自分達のおかれている状況に気付いていないことにある。自分達を政治の道具として操ろうとする政府の陰謀も知らず、ただ自分達の不满をユダヤ人にぶつけ、徒に虐殺に走ってしまうのだ。こうした暴徒たちの姿とは、「人格とか個性を喪失した匿名の個々人の単なる集合体で、顔をもたない不特定多数の群衆」であり、「それを構成するメンバーが、容易に独裁者に付和雷同し、独裁者の政治的

野心を実現するための単なる道具手段として利用されてしまうような集団」(山本、136 - 37)ということになるが、自分の責任を、集団的責任の中へ解消しさえすればよいと考えるような在り方が、ロシアの専制政府によって操縦されているロシア人に当て嵌まることは言うまでもない。それは例えばユダヤ人思想家 Martin Buber の言葉を借りれば、次のように説明できよう。

大衆の中の間人—それは一つの束にたばねられ、一本の棒によって岸沿いに向きを変え変え受け継がれて、水の中を浮流する木片のようなものである。時にはその木片は独自の運動をするかのように見えるかもしれないが、それは決してそのような独自の運動をしないし、更に、その中に入って木片が漂うその束ですら、実はそのように見える幻影があるにすぎない。(ブーバー 50)

この作品の最後の部分で、若い兵士が裁判へと向かうヤーコフの伴走をしていたとき、ヤーコフの暗殺を狙ったと思われる爆弾が炸裂し、その青年の片足が吹き飛ばされるという事件が起こる。その直前まで、ヤーコフはその兵士の《自由》を羨んでいたのだが、苦痛と恐怖の中で、その兵士はまるで「自分の足がこのことと何の関係があるんだ」(331)と言ってでもいるかのようにヤーコフには見えているが、これについて、Sheldan Hershinow という批評家は「それに対する答えは、その若者もヤーコフ同様、《自由》の身ではないということだ」(70)と述べている。つまり、兵士として国家に仕え、集団の中に埋没することで安心を得ていたとしても、要するに、歴史や政治や社会の悪はユダヤ人ばかりでなく、《集団》に生きているロシア人にも及んで来るのであり、結局、彼らは、「自由の幻想」(Ratner 83)の中に生きているにはほかならないのだ。

爆発の後、ヤーコフは夢想の中でツァーと対面している。言うまでもなく、ツァーこそ革命以前のロシアにおける最高権力者なのであり、その意味で、まさにロシアの《集団》を代表する人物なのだと見えよう。それゆえ、マラムッドは、ツァーをして、徹底して《集団》的な考えの下に語らせているのだ。ツァーは、ヤーコフとの対話において、ユダヤ人への迫害もロシア人への抑圧も、総て、国家という集団を護るために行われたのだとして、自己の《責任》を集団的《責任》のなかに解消したうえで、自分の個人としての善良さを強調しようとする。

以上のように、ヤーコフは自分の存在状況への省察から、ロシア人一般の実態への検討や、夢想の中でのツァーとの対決によって、《集団主義》に生きる彼らを羨望視することの愚かさを知る。しかし、翻って考えてみれば、《自由》を追及して行く際の二者択一的な二つの選択肢である個も集団も、実際には、同じ事柄の両面として一つの原因に源を発しているのだ。

ここまでは、主としてヤーコフの迫害者たちの陥っている状況に考察を加えてきたのだが、そうすることで実は、ヤーコフの内面に潜む《集団主義》的な誤謬へと陥ってしまいかねない可能性といったものを暴き出そうとしていたのにはほかならないのである。考えてみれば、逮捕後も簡単にツァーへの忠誠を誓うなど、ヤーコフは国家に対して非常に安易な迎合的態度をしばしば見せている。ツァーが語る言葉は、前半部分のヤーコフのそれに酷似している。社会的な立場を全く異にする二人ではあるが、《集団主義》の代表的な人物であるツァーにヤーコフと非常に似通ったセリフを語らせることで、マラムッドはおそらく、ヤーコフの中にも立場さえ変われば同じような態度に出る可能性のあることを示唆しているのである。

また、この二人の対話がヤーコフの夢想の中でなされている点に着目すれば、Lucio P. Ruotolo が述べているように、ツァーの語る言葉は、ヤーコフの内面に潜んでいたものがツァーの姿を借りて現れ出たものなのだと見えよう(137)。そして、ヤーコフがツァーのこのような考え方を断罪したとき、実は彼は自己のうちにある誤謬を切り捨てることになるのである。マラムッドは、個としての生き方を徹底するあり方も、集団に埋没するあり方も、実はコインの両面にすぎないことを露わにし(Abramson 59)、そうすることで、例えばボグロムのような虐殺が起こる原因が、そうした精神構造にあるのだと強く示唆しているのだといえるだろう。

IV.

以上のような考察と平行しながら、ヤーコフは次第に以前の限界を超えて行くことになる。直接的には、他者との関係回復を基軸に成長していくことになるのだ。まずは、家族、そしてコミュニティ、ひいてはユダヤ人同胞、さらには、ロシアの国民全体のために自分が耐えねばならないという自覚を持つに至る。そうした広がりこそ、この作品の持つダイナミズムもまた存在するわけだが、ここでは視点を変えて、いままで述べたような認識が、基本的にすべて、ヤーコフの内面においてのみ検証されていることに注目したい。というのも、彼が囚われている間の政治的状況や社会の動きが作品中で客観的に述べられることはなく、ただ、弁護士などの少数の支援者からのわずかな情報としてヤーコフに与えられるに過ぎないからだ。なおかつ、ポグロムが頻発する時代に、しかも大規模なポグロム発生の危機を抱えている状況を背景にしていながら、集団的な生き方に埋没する人間たち、すなわちポグロムを実行する人間たちの心理も直接的に語られることはなく、つまり集団が集団として語られることはなく、すべてがヤーコフの意識の中でのみ語られ、外的な事象は実に限られた情報しか与えられないというのはいささかバランスを欠いていると思われるだろうからだ。

考えてみれば、マラマッドには本来そういう傾向があることがわかる。たとえば、『フィクサー』の次の長編『テナンツ』(*The Tenants*, 1971)でも、やはり社会的な問題、すなわち、アメリカの1960年代後半における黒人とユダヤ人ひいては白人の深刻な対立が描かれるが、その対立の構図は、一人の黒人と一人のユダヤ人との対立の構図に置き換わってしまっており、マラマッドが『テナンツ』はファナティシズムを出し抜くために書いた(Shenker 22)と明言するにもかかわらず、ファナティシズムの熱狂そのものを描きはず、あくまでも個人と個人の関係性の中で問題を突き詰めようとするのだ。そして、やはりすべては主要人物がこの問題を内面的にどう捉えていくかに重点がおかれ、外的な社会の動きや政治的な動向などはぐっと背景に退いている。『テナンツ』のラストは現実か幻想か明確ではないものの、二人の登場人物の殺しあうシーンで終わる。ここに示唆されているのは、こうした人種間の問題もいわゆる個人レベルでの覚醒がなければ最終的な決裂に終わるほかないのだという警告だとも言えよう。さらに、マラマッドはいわゆるホロコーストの生存者が登場する短篇をいくつか書いているが、そこでも、中心的な主題は、その生き残りの人たちと向き合う登場人物たちがいかなる内面的な覚醒に至るか、もしくは至ることができないかにあり、マラマッドの関心のありかがどこにあるかを示唆している。このような扱い方に窺えるのは、政治的・歴史的なパースペクティブをずっと背景に押しやっても人間の精神のありようにフォーカスを当てようとする確固たる姿勢だろう。その結果、マラマッドの作品は、仮に歴史小説の装いを持ってはいいても、個別的、具体的な事象を離れ、かなり抽象的な色彩を帯びてくると言わねばならないだろう。

マラマッドは特にその初期作品において、ユダヤ人の登場する都会、それもニューヨークを思わせる街を描いた作品を数多く残しているが、そうした作品群について同じユダヤ系作家の Philip Roth は、次のように、マラマッドの描くニューヨークは“timeless”で“placeless”に過ぎると批判したことがある。

The Jews of *The Magic Barrel* and *The Assistant* are not the Jews of New York City or Chicago. They are Malamud's invention, a metaphor of sorts to stand for certain possibilities and promises... Malamud, as a writer of fiction, has not shown specific interest in the anxieties and dilemmas and corruptions of the contemporary American Jew, the Jew we think of as characteristic of our times. Rather his people live in a timeless depression and a placeless Lower East Side.... (Roth 127)

確かにマラマッドの描くニューヨークおよびそこに登場するユダヤ人はあまりにも現実感に乏しいと言えるかもしれない。時間的な設定のモデルが 30 年代の大恐慌時代にあると容易に思わせるとはいえ、明示されるケースはほとんどなく、場所的な記述も実に乏しいため、彼の描く世界はかなりの抽象性を帯びてしまっているのだ。この点について結論だけを述べるなら、そうした意図的な抽象化によって、30 年代という資本主義の矛盾が噴出した現代的状況と、20 世紀冒頭のユダヤ人居住区やそれ以前の旧世界の時間が止まったような世界が混交し、現代都市ニューヨークでありながら東欧ロシアの“folk getto”や“shtetl”でもあるという、いくつかの時空が交差する場所をマラマッドは創造したのだ。そうすることによって、マラマッドは自分のモチーフを十全に活かした作品群を描ききったのだということになる。

同じような手法は、基本的に史実に忠実であるがゆえに限定的とはいえ、この『フィクサー』にもかなり応用されているとみることができる。マラマッドはいくつかのインタビューで、この作品を構想するにあたり、ベイリス事件のみならず、同じくユダヤ人が冤罪で迫害されたフランスのドレイフュス事件、サッコーヴァンゼッティ事件、それにアメリカにおける黒人のおかれていた状況や公民権運動、さらにはナチスドイツの反ユダヤ主義などを念頭に置いたと答えている (Hicks 37 - 39)。特にマラマッドがヤーコフを次の引用のごとく、

My father told me the Mendel Beiliss story when I was a kid. I carried it around almost forty years and decided to use it after I gave up the idea of a Sacco and Vanzetti novel. When I began to read for the Sacco and Vanzetti it had all the quality of a structured fiction, all the necessary elements of theme and narrative. I couldn't see any way of re-forming it.... ..so I invented Yakov Bok, with perhaps the thought of him as a potential Vanzetti. (Stern “The Art of Fiction: Bernard Malamud” 62)

“potential Vanzetti”と呼んでいるように、ヴァンゼッティのキャラクターがかなり参考にされていることで、単に革命前のロシアの状況にとどまらず、さらに時代を経た現代的ニュアンスをも付け加えながらアメリカの政治的状況をも暗示する結果となり、また、ヤーコフが認識するロシアのユダヤ人の姿に 1966 年当時のアメリカ黒人の姿をダブらせた Stanley Elkin による指摘は(390)、次のような批判、つまり、『フィクサー』におけるユダヤ人とアメリカ黒人のアナロジーは明白なのに、マラマッドが “timelessness” へ傾くあまり、それを歴史的に意味あるものとするすべての社会的政治的な含みを無効にしてしまっているという批判を招くことにもつながろう。

しかし、この “timelessness” という批判は、この作品の本質を言い表しているとも考えられる。確かに『フィクサー』は歴史小説の装いを持ち、具体的、個別的な事件に基づいて書かれ、特定の場所で特定の歴史的な時間に設定されている。しかし、マラマッドはその枠に過度に縛られることなく、自身が「できうるかぎり folk tale 民話に近づけるべく努めた」(Field 38)、また、“First, to throw out the real Beiliss and replace him with Yakov Bok; second, cut down the cast to a few people; third, to mythologize—that is, make metaphors and symbols of the major events and characters (Lehmann - Haupt 8.)” と「大きな出来事やさまざまな人物像のメタファーやシンボルを作成する、すなわち作品を神話化することを考えた」と述べているのが暗示するとおり、時代を超え、地理を超えたところで起こったさまざまな事象や事件のニュアンスを大胆に組み込むことで、先に触れた初期作品にも似た、一種の抽象的な場所と時間を作り出していることになるのだ。だからこそ、Tony Tannar はこの作品を、時代は人間の歴史のどの時代であってもおかしくない、歴史というより、「民話と夢の中間物」(334)と呼んだのだらうし、Robert Alter が、ベイリス事件を題材にした Maurice Samuel の *Blood Accusation: the Strange History of the Beiliss Case* (1966) を引用しつつ、作品の歴史的な枠組みを超えて『フィクサー』は、単に反ユダヤ主義についてではなく、20 世紀の悪夢についての書だと述べることになったのだらう (Alter)。

また、Robert Scholes がこの小説を批判して、「歴史小説としてはブア」(106)だと難じたのは「“external events”を描き損ねているからだ」(qtd. Handy 77)というのが理由だが、実はまさにその点にこそ『フィクサー』の真骨頂があることになる。あくまでも、具体的、個別的な事件をモデルに使いながら、その事件にまつわる外的な事象や歴史的な枠組みをずっと背景に退かせることによって、先ほど述べたような時代を超え、地理を超えた要素を挿入することもできたのであり、また、同時に主人公の内面の変化に集中することによって、個別的な事象の限界を超えた、一種の寓話のレベルへと作品を押し上げることになるからだ。これはまさに、ヤーコフの閉じ込められる牢獄、物理的具体的な文字通りの牢獄が、次第に象徴性を帯び、ヤーコフ自身の精神が陥っていた利己主義的な世界観をメタフォリカルに表現する、ヤーコフの閉ざされた精神のメタファーとしての牢獄を意味し始めるのと似て、個別的である時代の歴史の枠内にある政治的出来事が、その限界を超えて、もっと普遍的な意味合いを持つことになるということだろう。

マラマッドはこの作品について、“I did not want simply to novelize the actual case of a persecuted Jew. My problem was to disinvent history and invent mythology with the object of portraying timeless injustice. (Lehmann - Haupt 8)”と、「歴史を“disinvent”し、神話を“invent”することを考えた。それは“timeless”な不正、不法を描く目的があったからだ」と述べているが、まさに、いままで述べてきたような表象の方法論をもって、その時間を超えた神話化、もしくは寓話化を成し遂げたのだと言えるだろう。

スターンはマラマッドの自宅を訪れたとき、そこには、先ほど触れた、ペイリス事件と同様にユダヤ人が冤罪に巻き込まれたフランスのドレイフス事件に関する膨大な文献があったことを報告している (“Malamud Seen and Unseen” 31)。ペイリス事件と同じくマラマッドがこのドレイフス事件に多大なる関心をもっていただけが窺われる。なぜ、マラマッドがドレイフス事件を扱わず、ペイリス事件をモデルにしたかはあまり明らかではないが、ドレイフス事件はペイリス事件と違って、エミール・ゾラをはじめとする多数の知識人が支援に立ち、世論を二分する論争に発展したことが知られている。最終的にドレイフスは無罪を勝ち取ることになるが、支援の大きさもあって、ドレイフス個人はこの事件の解決にさほど影響を与えることはなかったものと推測される。

一方、ペイリス事件の場合は、支援の輪も小さく、ペイリスはドレイフス以上の苦境にあったものと考えていいだろう。しかも、権力側からの脅しや脅迫は苛烈で、有罪を認めないまでも他のユダヤ人を犯人だと名指しすれば恩赦を与えるといった誘惑までもあった模様だ。しかし、その苦境の中で彼は最後まで誘惑に屈することなく、有罪も認めなかったのだ。そのことによって、彼は、予想された大規模なポグロムの発生を防ぐこともできたのだと言えるだろう。まさに、その点にこそ、マラマッドがこのペイリス事件を選択した理由があるのではないだろうか。つまり、人間は歴史に主体的に関わることができ、その流れを変えることができるという実例をここにマラマッドは見出したのではないだろうか。ヤーコフは次の引用にあるように、

As for history, Yakov thought, there are ways to reverse it....

One thing I've learned, he thought, there's no such thing as an unpolitical man, especially a Jew. You can't be one without the other; that's clear enough. You can't sit still and see yourself destroyed. Afterwards he thought, Where there's no fight for it there's no freedom. (Fixer 334 - 335)

作品の最終段階で、「歴史を逆転する方法は存在するのだ」と語り、また、「自由の目的はそれ、つまり自由を他者のためにクリエイトすることだ」(319)と内心の声で語る。まさに、主体的に歴史や社会とかかわり流れを変えることもできるのだという宣言だといえるだろう。

実は、この作品には一箇所だけ、1913年2月27日という具体的な日付が記されている。それはまさにペイリ

スが獄中にあった時期と一致し、この作品がベイリス事件という個別的な特定の歴史上の出来事と深く関係していることを示している。しかし、マラマッドはその数ヵ月後に裁判が行なわれ、結局ベイリスが証拠不十分で釈放されるという結末を作品中に取り入れることはせず、表決の結果も定かではない状態、むしろ有罪もありうる状況で裁判に向かうヤーコフを描いて作品を終結させてしまっている。おそらくは、もしもその結末をそのまま用いてしまえば、タナーも指摘するように、作品の力点が、一つの変則的な歴史的瞬間の物語へと縮小されてしまうからであろう (338)。この結末の扱いだけを考えてもマラマッドの意図するところは明らかで、あくまでも個別的、具体的な歴史的事象を超越した、普遍的な物語、つまり、歴史や社会への時代を超えた人間の主体的なかわりの可能性のドラマを描ききることにマラマッドの意思があったとみるべきだろう。

『フィクサー』はポグロムのような大量虐殺を直接的に扱っているとはいえないだろう。しかし、基本的にポグロムが頻発する時代を背景とし、大規模なポグロム発生の可能性があるという危機的状況という設定を活かしつつ、いままで述べたような手法を駆使して、この物語を普遍的な意味合いをもった一種の寓話の域にまで高めるという表象の方法を用い、人間の主体的な歴史や政治とのかかわりの可能性のドラマを描ききったわけだ。つまり、虐殺や虐殺にまつわる状況を人間の主体性の可能性のドラマというかたちで表象したのではないかと考えられるのである。

Notes

1. 詳細についてはロス、p.253参照。
2. 21世紀になっても同様の嫌疑が語られている。Kessner, 90参照。
3. 政府や司法の腐敗と *The Fixer* との関連については Sterling 参照。

Works Cited

- Abramson, Edward A. *Bernard Malamud Revisited*. New York: Twayne Publishers, 1993. Print
- Alter, Robert. "Malamud as a Jewish Writer." *Commentary* 42.3 (September 1966).
<<https://www.commentarymagazine.com/article/malamud-as-jewish-writer/>> Web. 15 January 2015.
- Elkin, Stanley. "Review of *The Fixer*; by Bernard Malamud." *Massachusetts Review* 8 (Spring, 1968): 388 - 92. Print.
- Field, Leslie and Joyce. "An Interview with Bernard Malamud." In *Conversations with Bernard Malamud*. Ed. Lawrence Lasher. Jackson and London: UP of Mississippi, 1991. 35 - 46. Print.
- Handy, William J. "Malamud's *The Fixer*: Another Look." *Northwest Review* 8.3 (Spring, 1967): 74-82. Print.
- Kessner, Carole S, "Two Views of Jews: Bernard Malamud, Maurice Samuel, and the Beiliss Case." *Studies in American Jewish Literature* 29 (2010): 90 - 101. Print.
- Lehmann - Haupt, Christopher. "In and Out of Books." *New York Times Book Review* (September 4, 1966): Print.
- Malamud, Bernard. *The Assistant*. New York: Farrar Straus and Giroux, 1957. Print.
- . *The Fixer*. New York: Farrar Straus and Giroux, 1966. Print.
- . *Idiots First*. New York: Farrar Straus and Giroux, 1963. Print.
- . *The Magic Barrel*. New York: Farrar Straus and Giroux, 1958. Print.
- . *The Tenants*. New York: Farrar Straus and Giroux, 1971. Print.
- Ratner, Mark. "The Humanism of Malamud's *The Fixer*." *Critique* 9.2 (1967):81 - 4. Print.
- Roth, Philip. "Writing American Fiction." *Reading Myself and Others*. New York: Farrar Straus and Giroux, 1976. 127.

Print.

Ruotolo, Lucio P. "Yakov Bok," In *Critical Essays on Bernard Malamud*. Ed. Joel Salzberg. Boston, Massachusetts: G. K. Hall&Co, 1987. 125 - 139. Print.

Samuel, Maurice. *Blood accusation: the Strange History of the Beiliss Case*. New York: Knopf, 1966. Print.

Scholes, Robert. "Review of *The Fixer*." *Northwest Review* 8.2 (Fall - Winter, 1966). 106 - 8. Print.

Shenker, Israel. "For Malamud It's Story," *The New York Times Book Review* 76.3 (October: 20, 1971). Print.

Sterling, Eric. "Ritual Murder and the Corruption of Law in Bernard Malamud's *The Fixer*." In *Literature and Law*. Ed. Michael J. Meyer. New York: Rodopi, 2004. 99 - 117. Print.

Stern, Daniel. "The Art of Fiction: Bernard Malamud." *Paris Review* 61 (Spring 1975): 40-64. Print.

_____. "Malamud Seen and Unseen." In *The Magic World of Bernard Malamud*. Ed. Evelyn Avery. New York: State U of New York P, 2001. 29 - 33. Print.

Tanner, Tony. *City of Words*. New York: Harper&Row, 1971. Print.

ブーバー、マーティン 『ブーバー著作集第二巻』佐藤吉昭、佐藤令子訳、みすず書房、1968.

山本誠作 『M・ブーバーの研究』理想社、1966.

ロス、シーセル 『ユダヤ人の歴史』長谷川真、安藤鋭二訳、みすず書房、1966.